

Johann Wolfgang von Goethe (1749.8.28 – 1932.3.22)

ドイツ語原文収集ノート 吉田英生

<http://www.wissen-im-netz.info/literatur/goethe/gedichte/24.htm>

“Zahme Xenien”

Wie das Gestirn,

Ohne Hast,

Aber ohne Rast,

Drehe sich jeder

Um die eigne Last.

§ 1

手塚富雄：いきいきと生きよ

講談社 (1968)、サンマーク文庫 (2008)

1 不断の実行

こころが開いているときだけ

この世は美しい。

「格言詩」

阿呆、燃えているなら消せ、

燃えてしまったのなら、また建てろ。

詩「報告」

Narre! wenn es brent, so lösche,

Hats gebrannt, bau wieder auf!

“Rechenschaft”

大作をしないように気をつけたまえ。最もすぐれた人々でも大作には苦しむ。……わたしもそれで苦しみ、そのためにどんなに損失を受けたか、身にしみて知っている。……現在は現在としての権利を要求する。詩人のうちに日々湧きあがってくる思想や感情は、表現されんことを求め、また表現されねばならない。しかし大きい作をもくろんでいると、ほかには何も手がかからない。その他のすべての発想は退けられ、生活のゆとりさえなくなってしまう。……これに反して詩人が毎日現在をつかみ、機会がかれに提供したものをいつもすぐ新鮮な気持ちで取り扱おうと、かならずいつもりっぱなものができる。……いつかはゴールに達するというような歩き方ではだめだ。一歩一歩がゴールであり、一歩が一歩としての価値をもたなくてはならない。

エッケルマン『ゲーテとの対話』1823年9月18日

Nehmen Sie sich in acht vor einer großen Arbeit. Das ist's eben, woran unsere Besten leiden, gerade diejenigen, in denen das meiste Talent und das tüchtigste Streben vorhanden. Ich habe auch daran gelitten und weiß was es mir geschadet hat. ……Die Gegenwart will ihre Rechte; was sich täglich im Dichter von Gedanken und Empfindungen aufdrängt, das will und soll ausgesprochen sein. Hat man aber ein größeres Werk im Kopfe, so kann nichts daneben aufkommen, so werden alle Gedanken zurückgewiesen und man ist für die Behaglichkeit des Lebens selbst so lange verloren. ……Faßt dagegen der Dichter täglich die Gegenwart auf, und behandelt er immer gleich in frischer Stimmung was sich ihm darbietet, so macht er sicher immer etwas Gutes, ……Es soll nicht genügen, daß man Schritte tue, die einst zum Ziele führen, sondern jeder Schritt soll Ziel sein und als Schritt gelten.

詩はすべて機会詩でなければならぬ

エッケルマン『ゲーテとの対話』1823年9月18日

es müssen alles Gelegenheitsgedichte sein,

いきいきとした、天分ゆたかな精神をもった人が、実際的な意図をもってごく身近なことに力を注ぐ場合こそ、この世における最もすぐれたものである。

「箴言と省察」

Der lebendige begabte Geist, sich in practischer Absicht ans Allernächste haltend, ist das Vorzüglichste auf Erden.

“Maximen und Reflexionen”

活動だけが恐怖と心配を追いはらう。

どんな種類のものにせよ、制限のない活動はけっきょく破産をまねく。

「箴言と省察」

Unbedingte Tätigkeit, von welcher Art sie sei, macht zuletzt bankrott.

“Maximen und Reflexionen”

いや、議論は充分うかがったから、

ここらで実行を見せてもらいたい。

...気分がどうのこうのと言ったって何になります？

一時延ばしをしている人には気分は絶対にやって来ない。

...今日出来ないようなら明日もだめ。

一日だってむだに過ごしちゃなりません。

できそうなことは、思いきって、むんずと

その前髪をつかむことです。

つかんだ以上はいっかな放さぬ。

そして目的に邁進する。それがわれわれの決意だからだ。

『ファウスト』

Der Worte sind genug gewechselt,

Laßt mich auch endlich Taten sehn!

... Was hilft es, von Stimmung reden?

Dem Zaudernden erscheint sie nie

... Was heute nicht geschieht, ist morgen nicht getan,

Und keinen Tag soll man verpassen,

Das Mögliche soll der Entschluß

Beherzt sogleich beim Schopfe fassen,

Er will es dann nicht fahrenlassen,

Und wirkt weiter, weil er muß

“Faust”

何事も延期するな、

なんじの一生は不断の実行であれ。

『ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代』

Du im Leben nichts verschiebe;
Sei dein Leben Tat um Tat!
“Wilhelm Meisters Wanderjahre”

困難な務めを日々に果たすこと、
ほかにはなんの啓示も要らぬ。

『西東詩集』

Schwerer Dienste tägliche Bewahrung,
Sonst bedarf es keiner Offenbarung.
“West-oestlicher Divan”

昼のいそしみ、夕べの団欒、
汗の週日、たのしい憩いの日、
これを今後の呪文とせよ。

「宝掘り」

Tages Arbeit! Abendz Gäste!
Saure Wochen! Frohe Feste!
Sei dein künftig Zauberwort.
“Der Schatzgräber”

2 生きているあいだは

時を短くするものは何か、

活動。

時を耐えがたく長くするものは何か、

安逸。

『西東詩集』

Was verkürzt mir die Zeit?

Tätigkeit!

Was macht sie unenträglich lang?

Müßiggang!

“West-oestlicher Divan”

わたしの相続した遺産は、なんとすばらしく、大きいことだろう。

時間がわたしの財産だ。わたしの耕地は時間だ。

『西東詩集』

Mein Erbteil ist herrlich, weit und breit!

Die Zeit ist mein Besitz, mein Acher ist die Zeit!

“West-oestlicher Divan”

人間はいのち短きものである。

リーマーの記録から。ビーダーマン編『ゲーテとの対話録』

感激は幾年も塩漬けにしておく練ではない

不きげんは怠惰と同じです。つまり怠惰の一種なのです。わたしたちは生まれつき怠惰に傾きやすい。けれどいったん奮発すれば、仕事はすらすらはかどりますし、活動にほんとうの喜びを見いだすことができます。

『若いウェルテルの悩み』

Es ist mit der üblen Laune völlig wie mit der Trägheit, denn es ist eine Art von Trägheit. Unsere Natur hängt sehr dahin, und doch, wenn wir nur einmal die Kraft

haben, uns zu ermannen, geht uns die Arbeit frisch von der Hand, und wir finden in der Tätigkeit ein wahres Vergnügen.

“Die Leiden des Jungen Werthers”

だから、さあ出発だ。考えごとはいっさいやめて、まっしぐらに世の中へ乗り出しましょう。
...思案にふけて日を送っている人間は、悪霊にとりつかれて、草のないところをいつもぐるぐるまわっている牛や馬も同然です。そのまわりには、美しいみどりの牧場がひろがっているのに。
...いったいここは何という拷問所です。自分も退屈し、学生たちをも退屈させる。それで生きているなどといえますか。

『ファウスト』 中公文庫I p.129

Durum Frisch! Laß alles Sinnen sein,
Und grad mit in die Welt hinein!
...ein Kerl, der spekuliert,
Ist wie ein Tier, auf dürrer Heide
Von einem bösen Geist im Kreis herumgeführt,
Und ringsumber liegt schöne grüne Weide.
...Was ist das für ein arterort!
Was heißt das für ein Leben füren,
Sich und die Jungens ennuyieren?
“Faust”

生きているあいだは、いきいきとしていなさい。
1818年12月作『仮装行列』中のメフィストの言（[2008年サンマーク文庫版で追記された](#)）

『ファウスト』

der Lebende soll hoffen.

“Faust 10292”

昼のあいだは、はたらきなさい。

ボスアレーあての手紙

われわれが旅行をするのは、着くためではなくて、旅行をするためである。

「箴言と省察」

“Maximen und Reflexionen”

3 辛抱づよく

わたしは我慢ができなくなると
地球の辛抱づよさをかんがえる。
地球は毎日毎日くるくる廻り
毎年毎年大廻りをしているそうな。
わたしにだってほかにどういう仕方がある？
わたしもこのママさんの例にならおう。
「好範例」

我慢づよさを実証しなければならぬ者はだれか。大きい行為をしようとする者、山を
登る者、魚を釣る者。

「箴言と省察」

Wer muß Langmunt üben?

Der große Tat vorhat,
bergan steigt,
Fische speist.

“Maximen und Reflexionen”

大切なのは、偉大な意欲をもち、それを貫くだけの技量と堅忍力とをもつことだ。

エッセルマン 『ゲーテとの対話』 1932年2月17日

die Hauptsache ist, daß man ein großes Wollen habe und Geschick und
Beharrlichkeit besitze es auszuführen;

いったい自分はこの宇宙万有に向きあって何ものであろう。自分はその前に、またそ
の中心に立つことができるのだろうか？

『ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代』

Was bin ich denn gegen das All? sprach er zu seinem Geiste: wie kann ich ihm
gegenüber, wie kann ich seiner Mitte stehen?

“Wilhelm Meisters Wanderjahre”

大いなる事業が完成されるためにはひとつの精神があれば足りる、千の手をうごかすために。

『ファウスト』 第二部、第五幕

Daß sich das größte Werk vollende,
Genügt ein Geist für tausend Hände.

“Faust 11509”

4 迷いと酔いをもて

君の頭と心のなかが
きりきり舞いをしているなら
それが何よりめでたい話、
恋にも迷いにも縁のきれた人間は
墓に埋められてしまうがよい。

「エピグラム風－何よりのこと」

Wenn dir's in Kopf und Herzen schwirrt,
Was willst du Bessres haben!
Wer nicht mehr liebt und nicht mehr irrt,
Der lasse sich begraben.

‘Das Beste’ “Epigrammatisch”

諸君、そう駁論をふりかざして
うるさくしないでくれたまえ、
人は何かしゃべったとたん
もう自分で迷いはじめているものだよ。

「エピグラム風－立論駁論」

Ihr müsst mich nicht durch Widerspruch verwirren!
Sobald man spricht, beginnt man schon zu irren.

‘Spruch, Widerspruch’ “Epigrammatisch”

人間は努力するかぎり迷うものである。

『ファウスト』 第一部 天空の序曲

Es irrt der Mensch, solange er strebt.

“Faust 317”

わたしにはこれ以上の苦痛はあるまい。

天国にただひとりでいることより。

詩「ことわざ風」

Mir gäb' es keine größere Pein;

Wär' ich im Paradies allein.

“Sprichwörtlich”

わたしが独りで座っているとき、
これ以上にいい場所があるか。
わたしの酒をわたしは独りで飲む。
そのときわたしをさえぎる者はない。
わたしはわたしの考えたいことを考えているのだ。

『西東詩集』

SITZ ich allein

Wo kann ich besser sein?

Meinen Wein

Niemand setzt mir Schranken,

Ich hab' so meine eigne Gedanken.

“West-oestlicher Divan”

意欲と愛は偉大な行為にみちびく両翼である。

『イフィゲーニエ』

われわれはだしも酔っているべきだ。
若さは酒のない酔いなのだ。
年寄りが酒を飲んで若返るなら
それこそ靈妙至極な効験だ。
憂えなければならぬことは日々の生活が憂えてくれる、
憂いをはらうのが葡萄の力だ。

『西東詩集』の「酌人の巻」

TRUNKEN müssen wir alle sein!

Jugend ist Trunkenheit ohne Wein;

Trinkt sich das Alter wieder zu Jugend,

So ist es wundervolle Tugend.

Für Sorgen sorgt das liebe Leben

Und Sorgenbrecher sind die Reden.

“West-oestlicher Divan”

老いてはがんぜない子供に戻ると人は言うが、そうじゃなくて、
老いてこそ神に近いほんとうの子供に育つのですよ。

『ファウスト』 第一部「舞台での前戯」

Das alter macht nicht kindisch, wie man spricht,

Es findet uns nur noch als wahre Kinder.

“Faust 212”

5 与えることと受けること

適切な返事は愛らしい接吻のようだ。

「箴言と省察」

Eine richtige Antwort ist wie ein lieblicher Kuß.

“Maximen und Reflexionen”

最初の挨拶は何千倍もの値打ちがある。

だから挨拶するすべての人にやさしく挨拶を返しなさい。

『西東詩集』

Der erste Gruß ist viele tausend wert,

Drum grüße freundlich jeden der begrüßt.

“West-oestlicher Divan”

遺産を積んでからそれを与えようと思うより、いま一銭を明るい気持ちであげなさい。

『西東詩集』

受ける手がどんなに美しい形のものが、それを見る目を人がもっているなら、人は多くの喜捨をするだろう。

「箴言と省察」

Man würde viel Almosen geben, wenn mann Augen hätte zu sehen, was eine empfangende Hand für ein schönes Bild macht.

“Maximen und Reflexionen”

誰でも、他の人々の好意を喜びとする場合にだけ、ほんとうの意味でいきいきしているのだ。

『ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代』

Man ist nur eigentlich lebendig, wenn man sich des Wohlwollens anderer freut.

“Wilhelm Meisters Wanderjahre”

何を与えるかということよりも大切なのは、どう与えるかということだ。
ゲーテ訳のホルネイユ『嘘つき』

6 生を信ぜよ

誠実な友よ、何を信じたらいいのか、言ってあげよう。
生を信じなさい。生の教えは雄弁家や書物よりはるかによい。
詩「四季」

Wem zu glauben ist, redlicher Freund, das kann ich dir sagen:
Glaube dem Leben; es lehrt besser als Redner und Buch.
“Vier Jahreszeiten”

わたしと同じように生活を愛そうと試みたまえ
『ツァーメ・クセーニエン』

いつか死ぬという事実にはさからってなんになる、
そのために君は生をにがくするだけだ。
「エピグラム風」

わたしは人間であった。というのは、戦って生きてきた者だということだ。
『西東詩集』の「天国の巻」

ich bin ein Mensch gewesen Und das heißt ein Kämpfer sein.
“West-oestlicher Divan”

(前の詩に続いて)

しかもわたしは信仰をもって歌った。
愛人がわたしに誠実であることを、
世界は、どんな廻り方をしようとして、愛に充ち、感謝を忘れていないことを。
『西東詩集』の「天国の巻」

Und doch sang ich gläubiger Weise:
Daß mir die Geliebte treu,
Daß die Welt, wie sie auch kreiste,
Liebevoll und dankbar sei.
“West-oestlicher Divan”

行動する人間にとっては、正しいことを行うのが重要な問題である。正しいことが起こるかどうかについて、心を煩わすべきではない。

「箴言と省察」

Dem tätigen Menschen kommt es darauf an, daß er das Rechte tue; ob das Rechte geschehe, soll ihm nicht kümmern.

“Maximen und Reflexionen”

正義は広い領域を占めるが、心の善良さはより広い空間を占有する。

「箴言と省察」

畏敬を感じることは、人間のもつ最もよきものの一つである。

「箴言と省察」

内部の光がおぼろになると、彼女は外部の義務を最も忠実に果たそうと努め、内部が新しく輝きはじめると、至福の安らかさに身をゆだねる。

『ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代』

Sie denn, bei gedämpften inneren Licht, äußere Pflichten auf das treueste zu erfüllen strebte, bei frisch aufleuchtendem Inneren sich der seligsten Ruhe hingab.

“Wilhelm Meisters Wanderjahre”

呼吸には二種の恵みがある。

空気を吸いこむことと、空気から解放されること。

前者は胸を圧迫し、後者は胸をさわやかにする。このように生は靈妙にまじりあっているのだ。

だから、神が君を圧迫するときは、神に感謝せよ。

そして神がその圧迫を解いてくれるときには、神に感謝せよ。

『西東詩集』

Im Athemholen sind zweierlei Gnaden:

Die Luft einziehn, sich ihrer entladen

Jenes beträngt, dieses erfrischt;

So wunderbar ist das Leben gemischt.
Du danke Gott wenn er dich preßt.
Und dank ihm wenn er dich wieder entläßt.
“West-oestlicher Divan”

わたしは見た。しかしわたしは信じない。
エッケルマン 『ゲーテとの対話』 1931年7月20日
Ich habe es gesehen, aber ich glaube es nicht.

7 永遠なる女性的なるもの

輝く聖母（かつてグレートヒェンと呼ばれた贖罪の女にむかって）

さあ、おまえ、もっと高いところへお昇り！ おまえがいると思うと、その人はついてくるから。

『ファウスト』 第二部、終幕

Komm! hebe dich zu höhern Sphären;

Wenn er dich ahnet, folgt er nach.

“Faust 12094”

永遠なる女性的なるもの、

われらを高みへ引き行く。

『ファウスト』 第二部 終幕

Das Ewig-Weibliche

Zieht uns hinan.

“Faust 12110”

人間の活動はすぐたゆみがちになる、すぐ絶対的な安息をもとめたがる。だからわたしは、刺激したり引きこんだりする仲間を人間につけておく、それを悪魔としてはたらかせておくのだ。

（天使たちに向かって）だがおまえら、神のまことの子たちはな、生きたゆたかな美しさを見てたのしむがいい。永遠に創りはたらく生成の力が、おまえたちのまわりに愛のやさしい垣根をめぐらすがいい。そして移ろう現象としてゆらいでいるものを、おまえたちは持続する思惟によってしっかりとつなぎとめるのだ。

『ファウスト』 天空の序曲

Das Menschen Tätigkeit kann allzuleicht erschlaffen, Er liebt sich bald die unbedingte Ruh; Drum geb ich gern ihm denn Gesellen zu, Der reizt und wirkt und muß als Teufel schaffen.

Doch ihr, die echten Göttersöhne, Erfreuet euch der lebendig reichen Schöne! Das Werdende, das ewig wirkt und lebt, Umfass euch mit der Liebe holden Schranken, Und was in schwanken der Erscheinung schwebt, Befestiget mit dauernden Gedanken.

“Faust 340”

そして海から陸へ、陸から海へとあらしはあらしと戦っている。

その行き返る怒号のうちに

もっとも深い作用の連鎖がつくられる。

いま雷霆の破壊の焔は

道のゆくてに燃えあがる。

しかし、主よ、おんみの使徒たちは

おんみの世のおだやかな推移を敬っている。

『ファウスト』

Und Stürme brausen um die Wette,

Vom Meer aufs Land, vom Land aufs Meer.

Und bilden wütend eine Kette

Der tiefsten Wirkung rings umher

Da fiammt ein blitzendes verheeren

Dem Pfade vor des Donnerschlags;

Doch deine Boten, Herr, verehren

Das sanfte Wandeln deines Tags.

“Faust”

たしかに、この世で人を欠くべからざる存在にするものは、愛以外にはない。

『若いウェルテルの悩み』

Es ist doch gewiß, daß in der Welt den Menschen nicht notwendig macht als die Liebe.

“Die Leiden des Jungen Werthers”

婦人というものは、元来虚栄的なものであると言われている。けれども、それだからこそ彼女たちは美しく装うのである。そしてそういう彼女たちは、いよいよわたしたちに喜びをあたえてくれるのである。

『ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代』

Die Weiber, sagt man, sind eitel von Hause aus: doch kleidet sie und sie gefallen uns um desto mehr.

“Wilhelm Meisters Wanderjahre”

君は女性を告発して、男性から男性へと揺らいでいると言う。女性を非難してはいけない、女性は揺るがぬ男性を求めているのだ。

ビーダーマン『ゲーテ対話録』、「ルイーゼ・フォン・ゲヒハウゼンの報告」

女というものは、銀の皿で、そのなかにわれわれが金のリンゴを盛るのだ。女性に感ずるわたしの理念は現実から抽象したものではなく、わたしのもって生まれたものだ。もしくはどうしてか知らないが、わたしの心のなかに生じたものだ。だからわたしの描いた女性はみな成功している。みな現実に出会うものよりよい。

エッケルマン『ゲーテとの対話』1828年10月22日

Die Frauen sind silberne Schalen, in die wir goldene Äpfel legen. Meine Idee von den Frauen ist nicht von den Erscheinungen der Wirklichkeit abstrahiert, sondern sie ist mir angeboren, oder in mir entstanden, Gott weiß wie. Meine dargestellten Frauen-Charaktere sind daher auch alle gut weggekommen, sie sind alle besser, als sie in der Wirklichkeit anzutreffen sind.

「なぜわたしは移ろいやすいのでしょうか、ゼウスさま」と、美がたずねた。

「わたしは移ろいやすいものだけを、美しくつくったのだよ」と、神は答えた。

詩「四季」

Warum bin ich vergänglich, o Zeus? so fragte die Schönheit.

Macht ich doch, sagte der Gott, nur das Vergänglich schön.

“Vier Jahreszeiten”

事物のはかなさについて大騒ぎをし、現世のむなしさの考察にふけっている人々を、わたしは気の毒に思う。わたしたちがこの世に存在するのは、実際、はかないものを永遠なものにするためではないか。

「箴言と省察」

Ich bedaure die Menschen, welche von der Vergänglichkeit der Dinge viel Wesens machen und sich in Betrachtung irdischer Nichtigkeit verlieren. Sind wir ja eben deshalb da, um das Vergängliche unvergänglich zu machen;

“Maximen und Reflexionen”

8 認めること

ほんとうの自由な心とは「認める」ということである。

「箴言と省察」

Die wahre Liberalität ist Anerkennung.

“Maximen und Reflexionen”

寛容ということは、実はただ一時の心の動きであるべきだと思う。寛容は認知ということに移ってゆかなければならない。我慢することは、すなわち侮蔑することである。

「箴言と省察」

誰しも人を許すときが、自分を最も高めるときである。

「箴言と省察」

Wenn der Mensch alles leisten soll, was man von ihm fordert, so muß er sich für mehr halten als er ist.

9 探求と畏敬

思索する人間の最も美しい幸福は、探求しうるものを探究しつくし、探究しえないものを静かに敬うことである。

「箴言と省察」

ここに物理学の教授がいて、自分の著わした物理学概説や図式は、生きた自然や、精神のより高い要求にくらべたら、無にもひとしいものであることを、学生たちに充分直観させることができたなら、その人はこの上もなく尊敬すべき教授であろう。

人間は、世界の種々な問題を解くように生まれたのではなくて、まずどこに問題がはじまるかをたずね、次には把握しうるものの限界のうちにとどまるよう生まれついているのである。科学は一般にますます生活から遠ざかる。そしてまわり道をしてまた生活へもどるのだ。

詩人は真実を愛する。真実があるところ、詩人はかならずそれを感じ取る心を持っている。

「箴言と省察」

実際に仕事をしている芸術家に話を聞くのがいちばんよいことだ。なぜなら、かれはかれが真理とするところのものを、いつもじかに話してくれるから。

「箴言と省察」

あらゆる偉大なものは、われわれがそれに気づくやいなや、われわれを形成する。

エッセルマン『ゲーテとの会話』1828年12月16日

Alles Große bildet, sobald wir es gewahr werden.

人は至高のものに向かって努める場合にのみ、多面的である。

「箴言と省察」

Man ist nur vielseitig, wenn man zum Höchsten strebt,

“Maximen und Reflexionen”

人生は、たとえ卑俗に見えても、日常の平凡さにすぐ満足してしまうように見えても、かならずある種のより高い要求をひそかに抱きつづけ育てつづけている。そしてその要求を実現する手段をさがし求めている。

「箴言と省察」

Das Leben, so gemein es aussieht, so leicht es sich mit dem Gewöhnlichen, Alltäglichen zu befriedigen scheint, hegt und pflegt doch immer gewisse höhere Forderungen im stillen fort und sieht sich nach Mitteln um, sie zu befriedigen.

“Maximen und Reflexionen”

生産力をもつものだけが、真実である。

詩「遺言」

Was fruchtbar ist, allein ist wahr.

“Vermächtnis”

自分に実感がなければ、ひとを掴めるはずはない。心の底からほとぼしって聞いているみんなの心をひたむきな感動で引っ張ってゆくのでなけりゃだめだ。今日も明日も机にへばりついて、膠で接ぎ合わせたり、他人の賞味したお余りでごった煮をこしらえたり、掻きあつめた灰の中から、貧弱な火を吹き起こしたりするのでは、子供や猿どもには感心してもらえるかも知れん—それがきみらのお望みならばだ。しかし、真実、心から出たものでなければ、けっして心に達するものではない。

中公文庫 『ファウスト』 | p.47

Wenn ihr's nicht fühlt, ihr werdet's nicht erjagen,

Wenn es nicht aus der Seele dringt

Und mit urkräftigem Behagen

Die Herzen aller Höher zwingt.

Sitzt ihr nur immer! Leimt zusammen,

Braucht ein Ragout von andrer Schmaus

Und blast die kümmerlichen Flammen

Aus eurem Aschenhäufchen raus!

Bewundrung von Kindern und Affen,

Wenn euch darnach der Gaumen steht –
Doch werdet ihr nie Herzen schaffen,
Wenn es euch nicht von Herzen geht.

真理でも人真似で言われたときは、すでに魅力を失っている。人真似で言われた誤膠は、まったく吐き気を催させる。

「箴言と省察」

10 知と知恵

知恵はただ真実のなかにある。

「箴言と省察」

Die Weisheit iost nur in der Wahrheit.

“Maximen und Reflexionen”

あらゆる賢いことはすでに考えられている。ただわれわれはそれをもう一度考えてみなければならない。

『ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代』

Alles Gescheite ist schon gedacht worden, man muß nur versuchen, es noch einmal zu denken.

“Wilhelm Meisters Wanderjahre”

あやまちをした場合に、賢い人の知恵はもっともよく現れる。

「箴言と省察」

人は本来、ほとんど知らぬ場合にだけ、知るのである。知ることによって疑いは深まる。

「箴言と省察」

耳目はあざむかない。判断があざむくのだ。

「箴言と省察」

Die Sinne trügen nicht, das Urteil trägt.

“Maximen und Reflexionen”

現象の背後に何も求めないがいい。現象そのものが教示である。

「箴言と省察」

1 1 学問をつづけること

物のわかった聡明な人たちが老年になって学問を軽く見ることがあるとすれば、それはただ、かれらが学問から、また自分自身から、あまりに多くを求めていたことから来るのである。

「箴言と省察」

学問は、知る価値のないものや、知ることのできないものにたずさわることによって、はなはだしく妨げられる。

「箴言と省察」

Die Wissenschaft wird da durch sehr zurückgehalten, daß man sich abgibt mit dem, was nicht wissenwert, und mit dem, was nicht wißbar ist.

“Maximen und Reflexionen”

完全さに達するのは、学ぶ者のなしうることではない。習練をつづけていれば、充分である。

『ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代』

zu vollenden ist nicht die Sache des Schülers, es ist genug, wenn er sich übt.

“Wilhelm Meisters Wanderjahre”

物事を有用性によって解釈しようとする者は、こう言うだろう。牛は身を護るために角をもっていると。それではわたしは問おう。羊はなぜ角をもっていないのか、もっているにしても、なぜその角は耳のまわりに捲かれていて、何の役にも立たぬのかと。だが、牛は角をもっているのです、その角で身を護る、とわたしが言うとき、それは別のことを言っているのだ。

目的についての問い、なぜという問いは、まったく科学的ではない。だが、どのように、という問いをかかげれば、もっと前進できるのだ。——つまり、どのように牛は角をもっているか、とわたしが訊ねるとき、それはその有機体の観察へとわたしを導いてくれる。そして同時にわたしに、どうしてライオンは角をもたぬのか、またもちえぬのか、ということを見せてくれるのだ。

エッケルマン『ゲーテとの対話』1831年2月20日

Solche Nützlichkeitslehrer sagen wohl: der Ochse habe Hörner um sich damit zu

wehren. Nun frage ich aber: warum hat das Schaf keine? und, wenn es welche hat, warum sind sie ihm um die Ohren gewickelt, so daß sie ihm zu nichts dienen?

Etwas anderes aber ist es, wenn ich sage: der Ochse wehrt sich mit seinen Hörnern weil er sie hat.

Die Frage nach dem Zweck, die Frage warum? ist durchaus nicht wissenschaftlich. Etwas weiter aber kommt man mit der Frage Wie? — Denn wenn ich frage: Wie hat der Ochse Hörner? so führet mich das auf die Betrachtung seiner Organisation, und belehret mich zugleich, warum der Löwe keine Hörner hat und haben kann.

ある一つの事を真に知りこれを実行するのは、百様の事を半ば知るよりも、より高い教養を与える。

『ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代』

Eines recht wissen und ausüben gibt höhere Bildung als Halbheit im Hundert fältigen.
“Wilhelm Meisters Wanderjahre”

今は一面主義の時代だ。

『ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代』

Ja es ist jetzt die Zeit der Einseitigkeiten.

“Wilhelm Meisters Wanderjahre”

りっぱなヴァイオリニストになるように技術をみがきたまえ。そうすれば楽長が管弦のなかで喜んで君に地位を提供することは確実である。

『ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代』

Übe dich zum tuchtigen Violinsten und sei versichert, der Kapellmeister wird dir deinen Platz im Orchester mit Gunst anwiesen.

“Wilhelm Meisters Wanderjahre”

あることがどんなに容易であるかは、それを発明した人とそれに到達した人が知っている。

『西東詩集』

12 今日という日

つねにただ今日という日のつづくことが、「永遠」の存在を保証している。

「箴言と省察」

すべての無常のことは比喻にほかならず。

『ファウスト』 末尾

Alles Vergängliche

Ist nur ein Gleichnis

“Faust 12104”

事物のはかなさについて大騒ぎをし、現世のむなしさの考察にふけっている人々を、わたしは気の毒に思う。わたしたちがこの世に存在するのは、実は、はかないものを永遠なものにするためではないか。これはわれわれが「はかなさ」と「永遠」の意味をほんとうに知った場合にのみなしうることである。

「箴言と省察」

くりかえして言うことだが、もし単純でなかったら、世界は持続できないだろう。この貧しい土地はすでに数千年来耕されており、その力はいつも同じで変わらない。わずかの雨とわずかの日光を受けて、春のくるたびにそれはまた青々としてくる。

エッケルマン 『ゲーテとの対話』 1927年4月11日

Ich sage immer und wiederhole es, die Welt könnte nicht bestehen, wenn sie nicht so einfach wäre. Dieser elende Boden wird nun schon tausend Jahre bebaut und seine Kräfte sind immer dieselbigen. Ein wenig Regen, ein wenig Sonne, und es wird jeden Frühling wieder grün, und so fort.

わたしはこういう時代に生まれて非常な利益を得た。大きい世界的事件がつぎつぎに起こり、わたしの長い生涯にわたってつづいた。つまり、わたしは七年戦争、アメリカの独立、フランス革命、そして最後にナポレオン時代の全体——この英雄の没落やその後の事件も含めて——の生きた目撃者となった。これによってわたしは、これから生まれて、ああいう大事件を、理解しにくい書物を通じて知るよりほかはない人た

ちとは、まったくちがった結論と判断に達した。

今後どういうことが起こるかは、まったく予言できない。しかしおそらくわれわれはそう早くは平静な状態には達しないだろう。世界は中庸には安んじていない。勢力家は力を濫用しないではないし、民衆は世の中がしだいにりっぱになることを予期して、程よい境遇に満足するということがない。人間を完全なものにすることができるなら、完全な社会状態も考えられよう。しかし事實は、永久に動揺をかさねるにすぎないだろう。一方にはいい目に会っているものがあり、他方には難儀しているものたちがいるだろう。利己心と嫉妬とが悪性のデーモンとなって、戯れをつづけるだろう。そして党派の争いは終結することがあるまい。

いつの世においても最も理性的なことは、各人が、生来のものにせよ、習得したものにせよ、おのが職業につとめ、他人は他人の仕事をさまたげないことである。靴屋は靴型のそばに、百姓は鋤のうしろにとどまるがいい。

エッケルマン『ゲーテとの対話』1824年2月25日

Ich habe den großen Vorteil daß ich zu einer Zeit geboren wurde, wo die größten Weltbegebenheiten an die Tagesordnung kamen und sich durch mein langes Leben fortsetzten, so daß ich vom Siebenjährigen Krieg, sodann von der Trennung Amerikas von England, ferner von der Französischen Revolution, und endlich von der ganzen Napoleonischen Zeit bis zum Untergange des Helden und den folgenden Ereignissen lebendiger Zeuge war. Hiedurch bin ich zu ganz anderen Resultaten und Einsichten gekommen, als allen denen möglich sein wird, die jetzt geboren werden und die sich jene großen Begebenheiten durch Bücher aneignen müssen, die sie nicht verstehen.

Was uns die nächsten Jahre bringen werden, ist durchaus nicht vorherzusagen; doch ich fürchte, wir kommen so bald nicht zur Ruhe. Er ist der Welt nicht gegeben, sich zu bescheiden; den Großen nicht, daß kein Mißbrauch der Gewalt stattfinde, und der Masse nicht, daß sie in Erwartung allmählicher Verbesserungen mit einem mäßigen Zustande denkbar; so aber wird es ewig herüber und hinüber schwanken, der eine Teil wird leiden, während der andere sich wohl befindet, Egoismus und Neid werden als böse Dämonen immer ihr Spiel treiben und der Kampf der Parteien wird kein Ende haben.

Das Vernünftigste ist immer, daß jeder sein Metier treibe, wozu er geboren ist und was er gelernt hat, und daß er den andern nicht hindere, das Seinige zu tun. Der Schuster bleibe bei seinem Leisten, der Bauer hinter dem Pflug und der Fürst wisse zu regieren.

現世の世界は、われわれがそのために力をつくすだけの値打ちのないものである。なぜなら、いまある世界は、一瞬たてば滅びてしまうであろうから。われわれは過去の世界と未来の世界のために努力しなければならないのだ。すなわち、過去の世界のためには、その功績を認めること、未来の世界のためには、その価値を高めることをこころざさなければならない。

「箴言と省察」

Die gegenwärtige Welt ist nicht wert, das wir etwas für sie tun; denn die bestehende kann in dem Augenblick abscheiden. Für die vergangne und künftige müssen wir arbeiten: für jene, daß wir ihr Verdienst anerkennen. für diese, daß wir ihren Wert zu erhöhen suchen.

“Maximen und Reflexionen”

自分が何かに役立ちうるところ、それがわが祖国だ。

『ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代』

Wo ich nütze ist mein Vater land!

“Wilhelm Meisters Wanderjahre”

13 率直な表明

自説をうまく証明してやろうなどとは思わずに、自分の考えるままに率直に意見を述べるのが、つねによりよいやり方である。なぜなら、われわれが提出するあらゆる証明は、つまりはわれわれの意見の変換にすぎないのだから。また反対意見をもつ人たちはわれわれの意見にも証明にも耳を傾けなどはしないのだから。

「箴言と省察」

通常、理論というものは、忍耐を欠く悟性の性急なしわざである。そのような悟性は、好んで諸現象から離れたがり、その現象のかわりに、比喩や概念や、そして実際よくあることだが、ただことばだけをはめこむのである。それが単に便宜にすぎぬことは、人々も感じ、また実際見ているとおりである。だが、人間の情念や党派心というものは、どんなときでも便宜を欲するものではないだろうか。それも当然のことであって、それらは便宜というものをそれほどに必要としているのである。

「箴言と省察」

Theorien sind gewöhnlich Übereilungen eines ungeduldigen Verstandes, der die Phänomene gern los sein möchte und an ihrer Stelle deswegwn Bilder, Begriffe, ja oft nur ein Behelf ist; liebt sich nicht aber Leidenschaft und Parteigeist jederzeit Behelfe? Und mit Recht, da sie ihrer so sehr bedürfen.

“Maximen und Reflexionen”

ある国語の力はそれが他国のことばを排除するというところにあるのではなくて、それが他国のことばを併呑することにあるのだ。

「箴言と省察」

外国語を知らぬものは、自国語について何も知らぬものである。

「箴言と省察」

Wer fremde Sprachen nicht kennt, weiß nichts von seiner eigenen.

14 享受のための断念

旅行者というものは、多くのことを享受するために多くのことを断念するものである。わたしは、わたし自身をいつもそういう旅行者のひとりから見なしているから、誤った道は歩いていないと思う。

『親和力』 第二部第十章

“Nun glaub ich”, sagte er, “auf dem rechten Wege zu sein, da ich mich immerfort als einen Reisenden betrachte, der vielem entsagt, um vieles zu genießen.

“Die Wahlverwandtschaften”

つめたい心をもって自分自身と自分の意志のために生きているものは、おのれのさまざまな欲望を満足させるのもよかろう。しかし他の人々をよく導こうと努める者は、多くの欲望を断念する能力をもたねばならぬ。

ワイマルの君主、カール・アウグストに与えたことば

他者に教えようとする者は、かれが知っている最善のことを言わずにおくことがしばしばある。しかし、かれは一知半解にとどまっていることは許されない。

『ウィルヘルムマイステルの遍歴時代』

Wer andere lehren will, kann wohl oft das Beste verschweigen was er weiß, aber er darf nicht halbwissend sein.

“Wilhelm Meisters Wanderjahre”

15 批評について

大きい印象をあたえる本は、あれこれと批評できないのがほんとうだ。批評はまったく近代人の単なる習慣にすぎない、そんなものになんの意味があろうか。わたしたちは、本を読むときは、その本のはたらきかけを受け、このはたらきかけに身を任せざるべきである。そうすればわたしたちはその本について正しい判断に到達しよう。

「ミュラーとの談話」

批評にたいしては、われわれは防御することも抵抗することもできない。われわれはそんなものは頓着せず、行動することが必要だ。そうすれば批評はしだいにこちらに頭を下げてくる。

「箴言と省察」

Gegen die Kritik kann man sich weder schützen noch wehren; man muß ihr zum Trutz handeln, und das läßt sie sich nach und nach gefallen.

“Maximen und Reflexionen”

俗悪なものに対しては、種々にことばを浪費する必要はない。俗悪なものは、出現しても、すぐに滅びてしまうのだから。

「箴言と省察」

永久に否定ばかりする、永久に反対の態度をとる、永久に同時代者や周囲の者の欠陥と短所に攻撃の矢を放とうと身がまえている、そういうことをするくらいなら、わたしはいっそ首をくくって死んでしまったほうがましだと思う。

『ミュラーとの談話』

われわれをいちばんひどく批評するのは誰だろう、
自分にあきらめをつけたディレッタントだ。

「ことわざ風」

Wer uns am strengsten kritisiert?

Ein Dilettant, der sich resigniert.

“Sprichwörtlich”

敵があるからといって、わたしは自分の価値を低く考える必要があるか。

『ツァーメ・クセーニエン』

自分を実際以上に考えることと、真価以下に見つめることとは、共に大きなあやまりである。

「箴言と省察」

Ein großer Fehler: daß man sich mehr dünkt, als man ist, und sich weniger schätzt, als man wert ist.

“Maximen und Reflexionen”

自信

おたがい人間一びきさ、
めいめい自分のことを考えればよくわかる、
これでも自然はなかなかおれに
気前をよくしてくれたのだ。
いろんな苦勞も楽しみも
人のもたない自分の宝だ、
さすればめいめいこれからでも
きげんのよい顔してゆくべきじゃあるまいか。

16 目ざすべきこと

わたしたちはけっきょく何を目ざすべきか、
世間を知り、それを軽蔑しないことだ。

『ツァーメ・クセーニエン』

不愉快を感じることわれわれは自分の役に立てねばならない。それも生の一部、
いや、大部分なのであるから。

『ミュラーとの談話』

人間のことは考えるな、
事柄を考えよ。

『ツァーメ・クセーニエン』

友人の欠点だけを考えている人たちがいる。そこからはどんな利益もうまれてはこ
ない。わたしはいつもわたしの敵の価値に注意を向けてきた。そしてそのことから利益
をうけた。

「箴言と省察」

Es gibt Menschen, die auf die Mängel ihrer Freund sinnen; dabei ist nichts zu
gewinnen. Ich habe immer auf die Verdienste meiner Widersacher acht gehabt und
davon Vorteil gezogen.

“Maximen und Reflexionen”

相手のすぐれた長所には、愛をもって対するよりほかに抵抗の手段がない。

「箴言と省察」

『親和力』 第二部第五章

Gegen große Vorzüge eines andern gibt es kein Rettungsmittel als die Liebe.

“Maximen und Reflexionen”

愛を感じないものは、おもねることを学ばねばならない。そうでなければ世を渡るこ

とができない。

「箴言と省察」

Wer keine Liebe fühlt, muß schmeicheln lernen, sonst kommt er nicht aus.

“Maximen und Reflexionen”

人はほんとうに劣悪になると、他人のふしあわせを喜ぶこと意外に興味をもたなくなる。

「箴言と省察」

Wenn die Menschen recht schlecht werden, haben sie keinen Anteil mehr als die Schadenfreude.

“Maximen und Reflexionen”

高尚なものを受け入れようとする素質は、きわめてまれである。それゆえ日常生活では、そういうことは自分の胸のうちにだけおさめて、ただ人を引っばるために多少とも役立つ範囲で洩らしてゆくがいい。

エッケルマン『ゲーテとの対話』

肥っても痩せても

控え目でいりゃ我慢しなけりゃならぬ、

のさぼりゃ叩かれる、

どっちみちしょいこみはおなじだ、

のさぼっても控え目でも

§ 2

高橋健二 訳編

ゲーテの言葉

彌生書房 (1969)

すぐれたものを認めないことこそ、即ち野蛮だ。

エッケルマン 『ゲーテとの対話』 1831年3月22日

Dienstag, den 22. März 1831

denn worin besteht die Barbarei anders als darin, daß man das Vortreffliche nicht anerkennt.

Johann Peter Eckerman: Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens

<http://gutenberg.spiegel.de/buch/gesprache-mit-goethe-in-den-letzten-jahren-seines-lebens-1912/196>

(注: Reclam版 https://www.reclam.de/detail/978-3-15-002002-9/Eckermann__Johann_Peter/Gespraechе_mit_Goethe_や、山下肇訳の岩波文庫版には、この日は含まれていない。2016年2月22日に判明)

しかし、だれが他人に対する自分の優越を時おり残酷な仕方で見せびらかせないほどの教養を積んでいるでしょう。

『親和力』 第一部第二章

Doch wer ist so gebildet, daß er nicht seine Vorzüge gegen andre manchmal auf eine grausame Weise geltend machte!

“Die Wahlverwandtschaften”

人はどれほど隠遁して暮らしていようと、いつの間にか、債務者か、債権者になっている。

われわれに恩を受けているだれかに会うと、われわれはすぐそれに思いつく。われわれが恩を受けているだれかに会って、そのことに考え及ばぬことが、どんなにたびたびあるだろう。

『親和力』 第二部第四章

Man mag noch so eingezogen leben, so wird man, ehe man sichs versieht, ein Schuldner oder ein Gläubiger.

Begegnet uns jemand, der uns Dank schuldig ist, gleich fällt es uns ein.

Wie oft können wir jemand begegnen, dem wir Dank schuldig sind, ohne daran zu

denken!

“Die Wahlverwandtschaften”

人間は、何を滑稽だと思うかということによって、何よりもよくその性格を示す。

『親和力』 第二部第四章

Der Verständige findet fast alles lächerlich, der Vernünftige fast nichts.

人がわたしたちのところに来るのでは、その人を知ることはできない。人がどういふふうであるかを知るためには、わたしたちはその人のところへ行かなくてはならない。

『親和力』 第二部第五章

Wir lernen die Menschen nicht kennen, wenn sie zu uns kommen; wir müssen zu ihnen gehen, um zu erfahren, wie es mit ihnen steht.

自由でないのに、自分は自由だと思っているものほど奴隷になっているものはない。

『親和力』 第二部第五章

Niemand ist mehr Sklave, als der sich für frei hält, ohne es zu sein.

侍僕にとっては英雄なるものは存在しないとされる。それは、英雄は英雄によってのみ認められるということにもとづくのにほかならない。侍僕はおそらく自分の仲間なら、評価することを心得ているだろう。

『親和力』 第二部第五章

Es gibt, sagt man, für den Kammerdiener keinen Helden. Das kommt aber bloß daher, weil der Held nur vom Helden anerkannt werden kann. Der Kammerdiener wird aber wahrscheinlich seinesgleichen zu schätzen wissen.

天才も不滅ではないということほど、凡庸なものにとって慰めになることはない。

『親和力』 第二部第五章

Es gibt keinen größern Trost für die Mittelmäßigkeit, als daß das Genie nicht unsterblich sei.

愚か者と賢い人は同様に害がない。半分愚かな者と半分賢い者とだけが、最も危険である。

『親和力』 第二部第五章

Toren und gescheite Leute sind gleich unschädlich. Nur die Halbnarren und Halbweisen, das sind die Gefährlichsten.

§ 3

関泰祐

筑摩世界文学大系25

「ウィルヘルム・マイステル 修行時代」

第7巻 第1章 p.224

われわれが出会ったことはことごとくあとを残すもので、知らずしらずのうちに教養に貢献するものです。しかし、それを自分にむかっていちいち釈明しようとするのは危険です。そんなことをしたら、あなたは得意でなげやりになるか、あるいは意気阻喪して臆病になるかです。そしていずれにしても将来のさまたげになります。いちばん安全なのは、目の前にあるもっとも手近なことだけをやることです。

alles, was und begegnet, läßt Spuren zurück, trägt unmerklich zu unserer Bildung bei; doch es ist gefährlich, sich davon Rechenschaft geben zu wollen. Wir werden dabei entweder stolz und lässig, oder niedergeschlagen und kleinmütig, und eins ist für die Folge so hinderlich als andere. Das Sicherste bleibt immer, nur das Nächste zu tun was vor uns liegt,

“Wilhelm Meisters Lehrjahre”

Umlaut

“ßäëöüÄËÖÜ”